

研究教育活動

インクルーシブスポーツへの教材開発と 障がい者スポーツ団体との関係性について

実践報告 星槎国際高校那覇キャンパスと星槎大学の連携体育授業から

渋谷 聡¹・林 直樹¹・高木 由起子¹・門脇 彬人²・平安 泰知³

SHIBUYA, Satoshi・HAYASHI, Naoki・TAKAGI, Yukiko
KADOWAKI, Akihito・HIRAYASU, Taichi

キーワード：インクルーシブスポーツ、高大連携体育授業、教材開発、
沖縄県障がい者スポーツ協会

はじめに

2013年4月より星槎大学共生科学部共生科学科にスポーツ身体表現専攻が開設されてから、インクルーシブスポーツについて検討してきた。2017年4月から星槎国際高校那覇キャンパスとの連携で体育授業を行うことになり、インクルーシブスポーツへの教材開発と障がい者スポーツ団体との関わりを検討している。本稿では、インクルーシブスポーツにつながる高大連携体育授業とそれに関わる取り組みについて実践報告を行い、今後の展望を述べる。

1. 目的 (渋谷聡)

2013年4月に星槎大学共生科学部共生科学科にスポーツ身体表現専攻（以下、本専攻とする）が開設され、これまで本専攻内の実技科目のスクーリングスケジュールの管理運営方法の確立、レポート作成などの学修における支援、スクーリング視察やスクーリング報告書などによる授業の振り返りなど一定の成果をあげてきた（渋谷ら，2017）。それ以外にも、本専攻では共生社会におけるスポーツのあり方について検討している（林，2013；渋谷，2013；渋谷ら，2014；渋谷，2015）。こうした中、細田ら（2014）は、「障がいのあるなしにかかわらず、おのおののニーズに配慮したスポーツ」としてインクルーシブスポーツに注目し、その現状と課題について報告している。これは、共生社会を目指すスポーツの1つの

¹ 星槎大学共生科学部

² 星槎国際高校那覇キャンパス

³ 沖縄県障がい者スポーツ協会

方向を示していると考えられ、今後インクルーシブスポーツの具体的な提案や効果の検証を行っていく必要がある。

インクルーシブスポーツと類似した言葉に、ユニバーサルスポーツがある。秋政ら（2010）はユニバーサルスポーツを「様々な個性や能力に関わらず、あらゆる人にとって楽しめる」スポーツとしている。あらゆる人にとって楽しめるスポーツとは参加者のニーズによって変わってくる可能性がある。例えば、競技スポーツを現役選手として行っていて、勝負で勝つことが楽しいと思う人が、高齢者や子どもと一緒に本気で勝ち負けを競って楽しむことができるとは限らない。こうした点から、インクルーシブスポーツとユニバーサルスポーツは同意語ではないと考えられる。

星槎大学では、共に育む社会を目指している（星槎大学ホームページ「共生科学部について」）ことから、共生社会をスポーツによって普及させることが本専攻が行うことができる。このスポーツがインクルーシブスポーツであることは上述した通りである。その普及活動に少なからず貢献するのが、星槎国際高校と星槎大学が連携した体育授業（以下、高大連携体育授業とする）であり、2017年4月から星槎国際高校那覇キャンパス（以下、那覇CPとする）及び星槎国際高校沖縄学習センター（以下、沖縄GCとする）で実施している。この高大連携体育授業で開発・検証した教材を用いて、2018年度に本格的な高大連携体育授業を全国にある星槎国際高校の学習センターやキャンパスで実施する予定である。こうした高大連携体育授業の教材開発は、生徒おのおのニーズに配慮したスポーツ種目を素材としていることから、インクルーシブスポーツにつながると考えられる。それを全国にある星槎国際高校の学習センターやキャンパスで実施することによって、少しずつではあるがインクルーシブスポーツの普及につながっていく。

インクルーシブスポーツの普及には、地域を巻き込んでいくことも必要である。高大連携体育授業を実施している那覇CPでは、2017年4月より沖縄県障がい者スポーツ協会とも連携して体育授業を実施している。沖縄県障がい者スポーツ協会は、障がい者スポーツの振興や支援だけではなく、障がい者スポーツという枠組みを超えた全てのスポーツの振興を目指し、2012年7月に設立され、沖縄県各地でスポーツ教室を実施している（沖縄県障がい者スポーツ協会ホームページ）。インクルーシブスポーツは障がい者スポーツと同じ概念ではないが、地域を巻き込みながらスポーツを振興するという広い意味では共通の目的があることから、沖縄県障がい者スポーツ協会の活動を把握し、今後本専攻が進めるインクルーシブスポーツと連携することができるかどうかを検討することは必要なことである。

そこで本稿では、インクルーシブスポーツにつながる高大連携体育授業とそれに関わる取り組みについて報告するとともに、現状の課題を明らかにし、今後の展望を述べることを目的とする。

2. 那覇 CP における体育授業（門脇彬人）

1) 那覇 CP の体育授業

那覇 CP では体育や運動が苦手な生徒に対して体育やスポーツの楽しさを伝えるために、2017年4月より星槎大学の体育教員と連携して楽しい体育の教材開発を行っている。また、楽しい体育だけではなく、「関わる」、「考える」、「行動する」ことを学びのテーマとして実施している。星槎国際高校全体でも「関わり合い」に取り組んでいるが、那覇 CP は2017年10月現在で、在籍者が17名と他の GC（例えば沖縄 GC の生徒数は121名）と比べて少ない分、教員が生徒1人1人との関わりを持つ時間が相対的に多く取れる可能性がある（ただし、沖縄 GC の教員が生徒と関わりを持っていない、あるいは少ないということではない）。その中でも仲間と共に活動する機会が多い教科の1つである体育授業は、ペアまたはグループで取り組むゲームやワークを行うことによって、より多くの人と関わる機会を増やしている。

那覇 CP の体育授業では「考える」ことと、人と積極的に「関わる」習慣を身につけさせるためにチーム分けやペア決め、試合の組み合わせ（順）などは生徒同士で決めさせている。元清水商業高校サッカー部監督で、商業を担当教科としていた大滝雅良氏は「自分で見つけた答えだけが自分のものになる」という言葉を残している（茂木, 2006）。この「考える」と「関わる」ことは、すでに結果に現れてきている。体育授業を記録した動画から、チーム対抗で試合をするときに、2017年7月時点では作戦会議もなく各生徒がやりたいように取り組んでいたが、2017年12月時点ではチーム内での作戦会議を1つのチームが59秒間、もう1つのチームが2分11秒間行っていた。

2) 那覇 CP と沖縄県障がい者スポーツ協会との関係

那覇 CP の生徒は、沖縄県障がい者スポーツ協会が主催するスポーツイベントで競技者（参加者）のサポートとしてボランティア活動を行っている。しかし、ボランティア活動を行っていた生徒は、サポートするスポーツを経験していないことから、競技者（参加者）がどうすればパフォーマンスが向上するか、どうすれば危険なく行えるかなどの経験がなく、十分なサポートを行うことができていなかった。そこで、2017年度から過去にボランティア活動でサポートしたユニバーサルスポーツを体育授業で実施することで、今後のスポーツイベントに対するボランティア活動でより具体的なサポートができるだろう。また、那覇 CP の生徒が高校時代からスポーツにおけるボランティア活動を行うことによって、地域貢献活動への関心も持たせる狙いもある。

3) 那覇 CP における体育授業の今後の展望

現在、「関わる」、「考える」、「行動する」をテーマに体育授業を行っているが、今後も継続して行うことでより生徒の「積極性」を高めていきたい。星槎の3つの約束（星槎大学ホームページ「共生科学部について」）の1つに、「仲間を作る」というものがある。その仲間を

作するためには、積極的に人と「関わり」、共に「考え」、「行動する」必要性がある。もちろん、体育授業の目的には、生涯に渡って豊かなスポーツライフを継続（文部科学省，2009）させる必要があることは大前提であることから、その教材として、誰とでもどこでも取り組むことができるユニバーサルスポーツを体育授業の教材に生かしていく。ただし、教材開発は1人で行うこともあるが、研修や研究する機会も必要となる。この機会の1つとして、高大連携体育授業が重要である。星槎大学の体育教員が開発した教材を那覇CPの体育授業で実施し、それを参考にしながら著者の教材開発のきっかけにすることができる。また、高校が抱える体育授業内での課題を星槎大学の体育教員と共有し、今後その課題を解決する授業の改善を試みることができる。

文部科学省では、「スポーツをする人、見る人、支える人を重視する」（文部科学省，2010）ことがスポーツ立国戦略の基本的な考え方としている。スポーツイベントをサポートするというボランティア活動を行うことによって、スポーツを「支える」大切さを学ぶことができ、体育授業でスポーツを「する」ことの意味を考える機会を今後継続していきたい。

3. 沖縄県障がい者スポーツ協会におけるこれまでの取り組みと今後の展望 (平安泰知)

スポーツ基本法の基本理念において、「スポーツは障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければいけない」（文部科学省，2011）とされている。また、スポーツ基本計画では、「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が関心、適性等に応じてスポーツに参画することができる環境を整備すること（文部科学省，2012）」を基本的な政策課題として取り上げている。沖縄県障がい者スポーツ協会（以下、本協会とする）は、こうした考えを沖縄県で実現するために、障がい者を含む沖縄県民全体でのスポーツの振興を目指している（沖縄県障がい者スポーツ協会ホームページ）。

陶山（2006）によると、障がい者スポーツは、リハビリテーションスポーツ、競技スポーツ、生涯スポーツに分けられるとしている。リハビリテーションスポーツは、障がい者の体力の向上・維持、筋力・筋持久力、バランス、巧緻性などを向上あるいは改善させ、日常生活をより一層円滑に送れるようにする目的があるとしている。また、生涯スポーツは、障がい者の心身の健康維持・増進、心理的安定、楽しみ作り、仲間作り、社会参加など生きがいと潤いのある社会生活を送ることを目的としている。このように、障がい者にとってのスポーツは、パラリンピックなどの勝敗を競うものだけではなく、諸器官の機能回復や残存機能の向上、豊かな社会生活を送る手段としても大事な要素となっている。スポーツが健康の維持・増進、社会参加として大切なことであるということは認識されやすいが、それらへ参加するための環境整備が沖縄県ではまだ発展途上である。障がい者の通う特別支援学校では、体育授業など運動やスポーツをする機会も最低限しか実施されていない。また、障がい者スポーツチームの活動場所の確保も不十分である。障がい者スポーツを普及させる意味でも、本協

会は沖縄県内の小・中・高等学校での学習経験の実施（2017年7月から11月までに6回）や障がい者スポーツ大会の開催（2017年7月から11月までに4回）、障がい者スポーツ指導者講習会の開催（2017年7月から11月までに4回）している（沖縄県障がい者スポーツ協会ホームページ）。那覇CPの体育授業で行っている取り組みは、こうした活動の一環であり、生徒に対して障がい者スポーツをする機会を提供している。また、障がい者スポーツのチーム・団体にも意見を集約しながら、環境の整備や運営の向上につながるように努めている。その中でも本協会の事業に障がいの有無に関係なく誰でも参加できるユニバーサルスポーツのイベントの開催を進めている。ユニバーサルスポーツのイベントを開催することにより、スポーツの機会を提供し健常者も一緒に参加することで様々な人との交流もはかれ、地域社会への参加という目的も達成される。那覇CPの生徒は、こうしたイベントでボランティア活動としてユニバーサルスポーツの普及のサポートをしている。ただし、ただ生徒が経験したことのない障がい者スポーツをサポートするだけではなく、ボッチャなどを体育授業で実践することによって、初めて行う人に教えながら楽しさを伝えることができる。こうしたスポーツ普及活動を沖縄県各地で開催することができれば、沖縄県全体でスポーツ人口を増やすことができるであろう。

4. 沖縄県身体障害者スポーツ大会視察報告（高木由起子）

本専攻で行うインクルーシブスポーツは、高大連携体育授業の教材開発に留まることなく、スポーツを通して共生社会を目指すことが目的である。その過程として障がい者スポーツを巻き込んだ地域貢献活動、あるいは地域活性化につなげることも必要となってくる。そのため、高大連携体育授業を行っている那覇CPや沖縄GCが関わる沖縄県障がい者スポーツ協会との連携内容及び沖縄県身体障害者スポーツ大会の現状も把握していく必要がある。

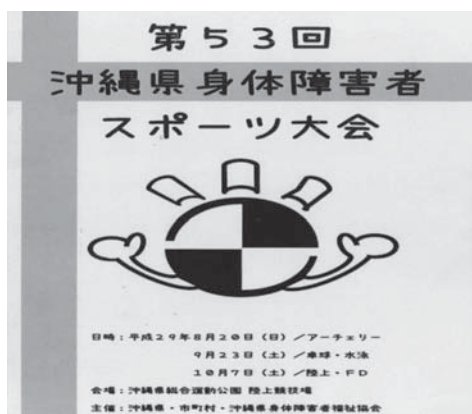


図1 第53回沖縄県身体障害者スポーツ大会のプログラム



図2 第53回沖縄県身体障害者スポーツ大会の風景



図3 第53回沖縄県身体障害者スポーツ大会のボランティア活動風景

ここでは、2017年10月7日（土）に行われた「第53回沖縄県身体障害者スポーツ大会（以下、本大会とする）」にボランティア活動として参加した沖縄GCの生徒を視察し、障がいのある競技者（参加者）との関わり方やボランティア活動での課題を確認することによって、今後の高大連携体育授業に生かすことを目的としている。

本大会にボランティアとして参加した沖縄GCの生徒は、人との関わりが好きで社会福祉に興味があり、人の支えになりたいと考えている生徒が自主的にボランティア活動に参加していた。本大会では、沖縄GCの生徒13名を含んだボランティア214人、要約筆記や手話通訳者等21人、23の選手団、約760人の選手（視覚障がい者、聴覚障がい者、身体障がい者、知的障がい者）らが参加している沖縄県で歴史のあるスポーツ大会の1つである。この大会において、沖縄GCの生徒は、ターボジャブという短いやりのようなものを遠くに投げるジャベリックスロー、砲丸投げ、乾燥小豆を入れた袋を遠くまで投げるビーンバックという種目にそれぞれボランティアとして配置されることになっていた。

ボランティアに参加している生徒は、声がうまく出せず選手の名前を呼び上げることが難しい様子が見られたため、引率教員や身体障害者スポーツ協会の担当者がサポートをしながら行った。一連の動きがわかるとサポートせず動けるようになったが、障がいのある競技者への言葉かけや補助といった積極的な関わりは難しい様子だった。沖縄GCの生徒だけではないが、初めてのことにに対して積極的に行うことや、初めて関わる人とコミュニケーションをとる難しさといった体験を、高大連携体育授業でどう生かしていくか考えていく必要がある。星槎大学の体育教員が行う高大連携体育授業は、通常のスポーツとルールや道具、広さ、人数などが異なる場合が多い。例えば、バレーボールのゲームでは、4名1チームとしてバドミントンコートで、ソフトバレーボールを使用して行う。ボールを一度床にバウンド

させながらゲームを行うことや、スパイク禁止やボールキャッチありというルールも追加される。そうしたこれまで経験していない場面で、学年の異なる生徒がチームを作りゲームを行う際、勝つためにはどうすればよいか、楽しむためにはどうするかという作戦会議を行う。個人が行うのではなく、周りの人たちと関わりながら課題に取り組むという環境を体育授業で取り入れることによって、生徒同士の関わりを持たせ、コミュニケーションを高める機会を増やしていく。

大会が終盤に近づいた頃、沖縄 GC の生徒は会場である競技場の周りを二手に分かれてごみ拾いを行った。スポーツでのボランティア活動は競技をサポートするだけではなく、ごみ拾いをする理由などを説明されることから、環境への配慮について考えるきっかけになっている。これによって、普段の学校生活で校舎や体育館などの整理整頓やごみ拾いなども積極的に行っていく可能性が広がっていく。

5. 高大連携体育授業の取り組み

1) 2017 年度の高大連携体育授業のスケジュール (渋谷聡)

2017 年度の高大連携体育授業を表 1 に示す。施設の使用状況によって、会場が変更になる可能性があるが、室内では体育館、屋外ではスポーツ施設のグラウンドやバスケットコートを使用して体育授業を行う。

表 1 2017 年度の高大連携体育授業スケジュール (2017 年 10 月 30 日現在)

実施月日(曜日)	実施対象校	担当教員	受講者数	実施施設	内容
5月17日(水)	那覇 CP	渋谷	12-15名	沖縄県体協スポーツ会館	ボッチャ(障がい者スポーツ)の視察および打合せ
6月21日(水)	那覇 CP	林	12-15名	沖縄県体協スポーツ会館	体づくり運動
7月5日(水)	那覇 CP	渋谷	12-14名	沖縄県体協スポーツ会館	ソフトバレーボール(ネット型スポーツ)
10月11日(水)	那覇 CP	林	17-19名	沖縄県体協スポーツ会館	バドミントン(ネット型スポーツ)
10月12日(木)	沖縄 GC	林	21-24名	屋外スポーツ施設	スピードミントン(ネット型スポーツ)
10月25日(水)	那覇 CP	渋谷	12-13名	屋外スポーツ施設	バスケットボール(ゴール型スポーツ)
10月26日(木)	沖縄 GC	渋谷	20-24名	屋外スポーツ施設	フットサル(ゴール型スポーツ)
11月29日(水)	那覇 CP	渋谷	12-15名	未定	バレーボール(ネット型スポーツ)
11月30日(木)	沖縄 GC	渋谷	20-24名	未定	バレーボール(ネット型スポーツ)
12月5日(水)	那覇 CP	林	12-15名	未定	体づくり運動
12月6日(木)	沖縄 GC	林	20-24名	未定	体づくり運動
12月20日(水)	那覇 CP	渋谷	12-15名	未定	キックベースボール(ベースボール型スポーツ)
12月21日(木)	沖縄 GC	渋谷	20-24名	未定	キックベースボール(ベースボール型スポーツ)
2月21日(水)	那覇 CP	林	12-15名	未定	バドミントン(ネット型スポーツ)
2月22日(木)	沖縄 GC	林	20-24名	未定	バドミントン(ネット型スポーツ)

2) インクルーシブスポーツにつなげる教材開発 (渋谷聡)

現在行っている高大連携体育授業は、インクルーシブスポーツにつながる体育授業を前提として教材を開発し、実践している。そこで、高大連携体育授業で行う教材は、那覇 CP や沖縄 GC の生徒のニーズに配慮した内容に変更している。具体的には、通常のバレーボールではボールに対して恐怖を感じている生徒がいたため、ソフトバレーボールを使用した。また、普段からあまり運動をしていないためにすぐ疲れてしまうという生徒に対して、行動範囲を狭めるためにバドミントンコートで行った。さらに、オーバーハンドパス（トス）やアンダーハンドパス（レシーブ）に自信がない生徒には、トスやレシーブの姿勢でボールをキャッチしていいこと、ジャンプのタイミングが合わないがスパイクをしたい生徒に対してテニスぐらいのネットの高さにしてゲームを行った。スパイクはジャンプしないで行うことができるため誰もがスパイクを打つことができるが、ボールキャッチが可能なためラリーにつながる試合展開になる。チームメイトと協力しながらラリーを続けることの楽しさを体験することが本時の目的である。体育授業後に行ったアンケートでは、この体育授業に対して10名中8名が「とても楽しかった」「楽しかった」と答え、2名が「どちらともいえない」という結果であり、本時の目標を達成することがある程度できたと考えられる。

このように、インクルーシブスポーツにつながる体育教材の開発は、既定のスポーツのルールで行うのではなく、そのスポーツの特性を素材として理解し、生徒に何を学ばせたいかを考え、安全に配慮しながら段階的な学びを楽しさを交えながら行っている。

3) 高大連携体育授業の取り組み例 (林直樹)

2017年11月までに、3回の高大連携体育授業を林が担当し、今後も授業を行う予定である(表1参照)。本稿では、これまでの取り組みの中から、体づくり運動について報告する。

体づくり運動は「体を動かす楽しさや心地よさを味わうことができるようにする」(文部科学省, 2013) ことが中学・高校ともに求められており、「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」とで構成されている。この「体ほぐしの運動」においては「心と体の関係気付き、体の調子を整え、仲間と交流することが主な狙いであり、多様な動きをつくる運動(遊び)は他の領域において扱われにくい様々な運動につながる基本的な動き培うことが主な狙い」(文部科学省, 2013) とされており、「気づき」「調整」「交流」をキーワードとして、それぞれのねらいに迫っていくことが求められる。今回の高大連携体育授業のキーワードは「インクルーシブスポーツ」であることから、障がい者スポーツにアプローチし、インクルーシブスポーツにつなげることができる「ブラインド・ウォーク」と「座☆バスケ・フリースロー」をワークとして選定した(林・高木, 2017)。

ブラインド・ウォークは2人1組のパディになり、1人は目を閉じ、もう1人は目を閉じた人と手をつなぎ、歩行の補助をしながら誘導していくものである。誘導の際には言葉がけを併せて積極的に行い、周りの人の状況や位置などを教えて導いていく。

このワークに関しては、大学の授業と同様にブラインド状態での多くの「気づき」「調整」「交流」を体感している様子がうかがえた。障がい者へのアプローチという観点で、街中の「点

字ブロック」について「誘導ブロック」と「警告ブロック」の意味について講義した。そして、点字ブロックは視覚障がい者にとっての道標であるが、その上に自転車や荷物を置いてしまったり、立ち止まってしまったりすることの意味を話し合った。「今までは気にも留めていなかった」、「これからは気をつけて見てみたい」などの活発な意見交換が行われた。また、図4のように街中でも点字ブロックがはがれてしまっていることがあることを伝えたが、このことは実際に街へ出て検索してみるフィールドワークへと発展できる。那覇GCはすぐ近くに国際通りなど多くの観光客が集まる地があるため、劣化した点字ブロック所在地のマップ作成などは非常に有効なフィールドワークとなると考えられる。

座☆バスケ・フリースローでは、まずバスケットボールにおける既知のフリースローを行い、それから椅子に腰掛けて同様にフリースローを行った。これは、目線の差異やシュートの難しさを体感させることを目的としたワークである。星槎大学での授業同様、「椅子に座るとゴールが非常に高く感じる」、「シュートが全く届かない」などの感想が聞かれた。座った状態だと足関節、膝関節、股関節という脚の関節伸展トルクと床反力から運動エネルギーを得られないために、主に肩関節屈曲、肘関節伸展、手関節掌屈といった関節トルクを源としてボールを投射しなければならない。このことから、立位でのシュート時に下肢の関節伸展からの連動動作においてシュートが成り立っていることに気づかせることができた。林ら(2017)は「不自由な部分やうまくいかない部分は他の工夫により補うことができるということ」を学ばせ、具体的な事例をいくつか挙げることによって様々な困難にも諦めることなく工夫していく姿勢を育てることにつなげることが期待できる」と述べている。本ワークの本来的な意義は上述した部分にあるのだが、今回取り上げた教材としてのバスケットボール



図4 点字ブロックがはがれてしまっている例

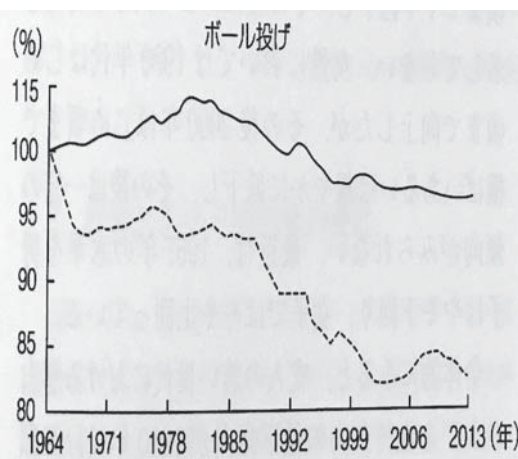


図5 1964年の体力テスト(16歳)・ボール投げの全国平均値を100%とした年次推移
(内藤久士「日本人の体力の年次推移」
体育の科学 Vol.66 No.7, 2016 p.469 から引用)

に対しての課題が後述のように存在した。発育発達の途上である中学生・高校生においては既知のフリースローシュートも十分に届かないケースがあった。体力テストにおけるボール投げの全国平均値を見ても、1964年のテスト開始から比べると投能力は低下傾向にある（内藤，2016）（図5）。運動・スポーツが不得手な生徒たちにおいては、既存のバスケットボールのゴールの高さが体力的に難しいこともあることが示唆された。

6. 全体的考察

これまで述べてきたインクルーシブスポーツにつながる高大連携体育授業において、いくつかのことが明らかとなった。那覇CPでは、生徒がチームメイトと協力して楽しい体育授業を受けることができ、体育教員は教材開発の参考になる。また、障がい者スポーツに関わることによって、社会参加への意味を学習することができる。本専攻は高大連携体育授業を行うことによって、インクルーシブスポーツの教材開発及び検証ができることと、これから星槎国際高校に体育授業を通して、教材開発のきっかけづくりを提供することができる。障がい者スポーツ協会は、那覇CPに障がい者スポーツを指導することによって、沖縄県内のスポーツ人口を増やす可能性がある。沖縄県障がい者スポーツ協会では、障がい者スポーツ大会や学校の障がい者スポーツにおける学習経験などを行うことによって、障がい者が積極的に社会に参加する環境を整えようとしている。ここに、本専攻がインクルーシブスポーツを用いてしっかり関わることによって、沖縄県をモデルケースとしたインクルーシブスポーツによる共生社会の構築を目指すことができる。このように、三者（本専攻、那覇CP、沖縄県障がい者スポーツ協会）の関係性を考察してきたが、ここで最も重要なことは、三者ともに多くの人が社会に参加し、認め合いながら生きていくことのできる社会（共生社会）を求めていることである。

最後に、インクルーシブスポーツとユニバーサルスポーツの関係について述べていく。上述した通り、インクルーシブスポーツとユニバーサルスポーツは同義語ではないと考えられる。実践している参加者のニーズが「何らかのスポーツをすること」そのものを楽しみを求めるのであれば、技術や体力といった要素は関係ないであろう。一方では、おのおののニーズに配慮する必要があるのなら、インクルーシブスポーツとしてそのニーズに合わせたルールや道具、広さなどを変更してニーズに合わせたスポーツを開発していけばよい。いずれにしても、星槎大学ではインクルーシブスポーツを広めることが第一義的な目的ではなく、あくまでもスポーツを通して共生社会を目指すことである。そういった意味では、障がい者スポーツ協会や那覇CPの考えるユニバーサルスポーツで共生社会を目指していくことも、インクルーシブスポーツを目指す過程として問題ないとする。

引用文献

秋政邦江・小野擴男. (2010). 「医療系大学における『健康体育』授業への車いすダンスの導

- 入—ユニバーサルスポーツの有効性—, 川崎医会誌一般, 36, pp.27-37.
- 林直樹. (2013). 「共生とスポーツ・身体・表現」, 共生科学研究 (星槎大学紀要), 9, pp.46-50.
- 林直樹・高木由起子. (2017). 「体づくり運動の授業における『インクルーシブスポーツ』的思考の導入と実践」, 星槎大学教職研究, 2 (1), pp.9-16.
- 細田満和子・渋谷聡・吉野ゆりえ. (2014). 「インクルーシブスポーツの課題と可能性—共生社会におけるスポーツについて—」, 共生科学研究 (星槎大学紀要), 10, pp.136-144.
- 茂木健一郎. (2006). 『プロフェッショナル仕事の流儀 6』, 日本放送出版協会, p.62.
- 文部科学省. (2009). 「高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編」, pp.15, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1282000_7.pdf, (2017.10.27 閲覧).
- 文部科学省. (2010). 「スポーツ立国戦略 基本的な考え方」, http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/detail/1297207.htm, (2017.12.20 閲覧).
- 文部科学省. (2011). 「スポーツ基本法 (条文)」, http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm, (2017.12.20 閲覧).
- 文部科学省. (2012). 「スポーツ基本計画 (概要)」, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/10/16/1319399_2.pdf, (2017.12.20 閲覧).
- 文部科学省. (2013). 「学校体育実技指導資料第7集 体づくり運動—授業の考え方と進め方— (改訂版)」.
- 内藤久士. (2016). 「日本人の体力の年次推移」, 体育の科学, 66 (7), p.469.
- 沖縄県障がい者スポーツ協会ホームページ, <http://www.okinawasad.net/about.php>, (2017.12.20 閲覧).
- 星槎大学ホームページ「共生科学部について」, <http://seisa.ac.jp/program/>, (2017.12.20 閲覧).
- 渋谷聡. (2013). 「『競技スポーツ』と共生」, 共生科学研究 (星槎大学紀要), 9, pp.36-40.
- 渋谷聡. (2015). 『スポーツ心理学を生かした『誰でもできる陸上競技』, 練習法・指導法』, 鎌倉春秋社.
- 渋谷聡・服部由季夫・林直樹. (2014). 「共生社会におけるスポーツのあり方を考える」, 星槎大学附属研究センター研究集録, 9, pp.37-39.
- 渋谷聡・服部由季夫・林直樹・高木由起子・田中操・山本健太・小澤勇人・阿部あずさ. (2017). 「スポーツ身体表現専攻における3年間の振り返りと今後の取り組みの提案—特に体育実技を中心として—」, 共生科学研究 (星槎大学紀要), 12, pp.124-136.
- 陶山哲夫. (2006). 「障がい者スポーツの最近の動向」, 理学療法科学, 21 (1), pp.99-106.